

新藤兼人著

日本 シナリオ史 上

ISBN4-00-001673-3 C0074 P2500E

定価2500円(本体2427円)

新藤兼人著

日本 シナリオ史

上

江苏工业学院图书馆
藏书章

岩波書店

日本シナリオ史 上

一九八九年一〇月三二日 第一刷発行 ©

定価二五〇〇円
(本体二四二七円)

著 者 新 藤 兼 人

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 下 町 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 二 五 五
株 式 有 限 公 司 岩 波 書 店

電 話 (三) 五 六 四 二 一
振 替 東 京 六 〇 六 四 〇

印刷・凸版印刷 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed Japan
ISBN4-00-001673-3

日本シナリオ史 ① 目次

シナリオ誕生前後……………1

ジゴマ登場 3 牧野省三はジゴマを見たか 8

シナリオあらわれる 12 映画青年谷崎潤一郎 20

小山内薫の門下生たち 32 澤東に夢を描いた若も

のたち 42 シナリオライター伊藤大輔 52

一 スジ一ヌケ三役者……………57

若ものは斬った！ 59 悪魔の星の下に 68 鰐元

三寸抜かんとして抜けず 71 大將軍の夜と昼 75

茂堪忍しておくれ 84

シナリオライターが生まれた……91

松竹蒲田脚本部 93

傾向映画 104

正座の視覚 107

流れるリズム 125

黄金時代の人たち……145

虹の都光の港キネマの天地 147 多摩川べりの青春

群像 157 小路の奥の友禅職人の息子 162 砦の森

の仕事師たち 170 京の巷のさむらいたち 175 海

の外の先生たち 187 映画はいかに戦ったか 193

山上伊太郎の死 204

シナリオ誕生前後

新藤兼人，明治 45 (1912) 年 4 月 22 日，広島県佐伯郡大字石内村(現，広島市佐伯区五日市町石内)に生まれる。本名兼登。兄 2 人，姉 2 人の 5 人兄弟の末子。



叔父の 2 回目の結婚式記念写真，前列左より 2 人目 新藤，2 列左より 2 人目 母，3 列右端 父

ジゴマ登場

『ジゴマ』をフィルムセンターの試写室で見た。ところどころ欠落しているが、観賞にたえるほどの原形は残されていた。一九二一（明治四四年）の映画がこれほどに形を残せたのは驚異である。

なによりもおどろいたことは、この映画の快適なテンポである。それはカットバックの手法が演出の基本になっているからだ。といってもこの当時、クローズアップ、バスト、ロングといった演出技術はなかったときで、ここでのカットバックは場面と場面との積み重ねのことである。場面の転回が善と悪との対比で構成されているので、そこにテンポとスピードがあらわれたのである。

当時日本の活動写真は、実写や舞台の芝居を写すだけだったので『ジゴマ』の快適なテンポには驚嘆したことだろう。

『ジゴマ』には、あきらかに「シナリオ」があるのだ。日本の活動写真はただ芝居を平面的（長いワンカット）に写すだけだったから「シナリオ」は必要ではなかった。さすがモリエールが生まれたお国柄、芝居は「組んで仕上げる」という伝統がある。ものを表現するにはAとBとの比較によらなければならない、ことの基本が自然と身についているのだらう。『ジゴマ』のシナリオがどんなものであったか、それを見ることはできないが、フィルムを見れば容易に

想像することはできる。

『ジゴマ』は、フランスのエクレール社が一九二一年、『ル・マルタン』という新聞に連載されたレオン・サジイの活劇小説を映画にしたものである。「ジゴマ」という怪盗をポーラン探偵が追うという探偵活劇で、監督はヴィクトラン・ジャッセ、ジゴマに扮したのは舞台俳優のアルキエールというひと。

まず、この映画の梗概をかいつまんで紹介しよう。

パリ市民を恐怖におとしいれた怪盗乙団、首領はジゴマ、犯罪のあとにZという文字を不敵にも残していく。

ポーラン探偵はジゴマを逮捕せんと機会を狙っている。警察署長がジゴマ逮捕の打合せにポーラン探偵の事務所にくる。事務員に化けて潜入したジゴマは、おまえらにジゴマは捕まらないぞ、と書き残して去る。まず不敵なジゴマの挑戦から始まる。

ジゴマは清純な娘ジュリアーナに横恋慕していて、誘惑せんとするが、ジュリアーナの恋人レオナルドに痛めつけられて逃げだす。その際配下になまわず指令書を不覚にも落す。指令書には乙団の集會場所が書いてある。

ポーラン探偵はそれを手に入れ、集會場所のマグダラ寺院に出かけるが、変装をジゴマの子分に見破られ、ジゴマは逃れる。一方ジゴマの子分は、ジュリアーナのつとめている婦人洋服店にあらわれ、ジュリアーナに麻酔薬をかがせて失神させ、大トランクに詰めこんで持ち去る。

マグダラ寺院でまたもジゴマZ団は集会する。寺院広間の中央にある(カメラの近く)大理石像の足下が地下の秘密室へ通じる入口になっており、床が開く仕掛けになっていて、集まってくるZ団の子分たちは次々と地下へ姿を消す。と、大理石像は実はポーラン探偵であって、地下へと追って行く。(うまいトリックだ)

地下の秘密室では女を混えての大饗宴、ジゴマはポーラン探偵のくるのを知っていて、天井から仕掛けの鉄柵を下してまんまと閉じこめる。ポーラン探偵は地団太ふんで口惜しがるがジゴマの嘲笑をあびるのみ。ジュリアースがトランクから出されてジゴマの意に従えと子分たちに折檻される。

ジゴマの子分たちはポーラン探偵を人気がない場所で殺すために、箱に詰めこみ、馬車に乗せて出て行く。馬車が郊外の道を行くと百姓の荷車と衝突する。(すべて好都合に出来ている)駁者同士の争いが起こり、騎馬巡査があらわれ、馬車の箱を不審に思っけ開ける、とポーラン探偵が出てきたのでびっくり。

次なる場面は、ポーランの攻勢、駁者に催眠術をかけてジゴマの所へ行かせる。(このアイディアは奇抜)駁者はふらふらとシャンゼリゼのレストランで宴会をやることを相談しているジゴマの所へ行き、ふらふらとポーランのもとへ戻ってくる。

そこで、警官隊は当日レストランに踏みこむのだが、ジゴマはいち早く警官に変装して逃走。ポーランはそれを見破って追跡。ジゴマはピストルで自動車の運転手をおどして駅へ行き、発車する汽車にとび乗る。ポーランもとび乗る。走る汽車の上の大格闘、ポーラ

ンはジゴマに突き落される。

入院したポーラン探偵は、ジゴマがアルプスにあらわれたことを知り、早速変装して出かける。

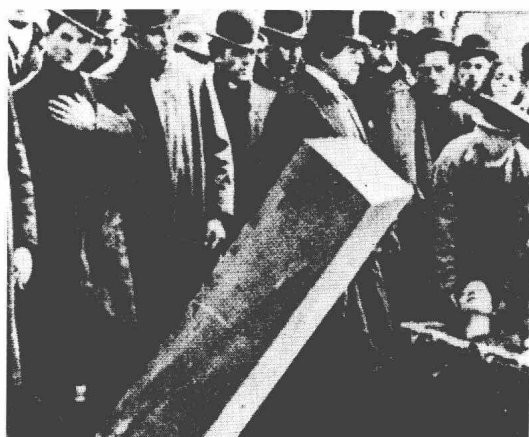
アルプスでポーランは怪しい老人に出会い、尾行。老人がホテルにはいたのでポーランも泊る。もちろん老人はジゴマ。その夜、ポーラン探偵の部屋にジゴマの子分がポーラン殺害の目的で忍びこんでくるが、ポーランが仕掛けた機械に手をはさまれ、ワナにかかったことを知った子分は自ら命を絶つ。(盗賊にも骨のある奴がいる)ジゴマは子分が戻らないので黒装束に身を固めて廊下に出たが、ポーランにみつかつて格闘、ジゴマの力がまさり、またしてもポーランはジゴマをとり逃がす。

翌日ジゴマは登山する。山案内人に化けたのはポーランである。(こことく変装くらべチエくらべ)ポーランは山中でついにジゴマを逮捕するが、ジゴマは隙を見てポーランを谷底に突き落とす。ポーラン探偵の運命やいかに。

舞台はバリに移る。オペラ座開幕、富豪に変装したジゴマは、子分からポーランが客に変装していると知らされる。ジゴマは女を使ってポーランを誘惑させる。もちろんポーランは誘惑などにはのらない。そこでジゴマは巧みにポーランの虚を衝いて一室に監禁し、客席を混乱させるために舞台上に放火。大混乱となつてからくもポーランは脱出、焼死体から宝石を盗んでいるジゴマを発見、逮捕する。ジゴマもいよいよ悪運つきたか。

警察はジュリアースの行方を、ジゴマに案内させ、マグダラ寺院

『ジゴマ』



の地下室に監禁されていたジュリアーヌは助け出された。がジゴマは隙をみてまたしても逃走、しかし警官隊の追跡は急、もはや運のつきたことを知ったジゴマは、手下一同を集めて部屋を爆破して玉碎する。

だが、ジゴマは不死身、(一見死んだと見せるところがなかなかのクセモノ) 情婦の家に隠れてZ団を再建、恨み深きポーランに報復せんと腐心し、ポーランが買った薪に火薬を仕掛け、それとは知らずポーランは薪を暖炉にくべるや火薬は爆発して瀕死の重傷を負う。(了了禁止の応酬)

ポーランに代って新たな探偵ニック・カーター登場、ポーランは死のまぎわ、後任のカーターに秘密を告白、二〇年前に妻に死なれたとき、里子に出した一人娘が行方知れずだ、この娘のことを頼むといって死ぬ。

カーター探偵は、ジゴマが出入りするクラブに踏みこむが、ジゴマは素早く老人に変装して逃走、カーターはジゴマが残したバッグの中から出た名刺を頼ってオルガ(ポーランの娘)の隠れ家へ行く。

オルガはカーターの口から、父の死を聞いて、ジゴマ逮捕に協力することを誓う。オルガは運命の皮肉を嘆く。ジゴマの一味だったのだ。(このへんのメロドラマ仕掛けも心得たものだ)

カーターはオルガの案内でジゴマの隠れ家を襲うが、ジゴマは壁のどんでん仕掛けを利用して逃げる。(どんでん仕掛けは世界中共通らしい)。

ジゴマはマルセーユにあらわれ、宝石商を襲う。カーターはオル

ガの連絡でジゴマがあるパーティを狙っていることを知り、警視総監に変装してパーティに行く。余興に出演している手品師がジゴマであると知り、逮捕するが、これが実はジゴマの二セモノ、またしてもジゴマは探偵の裏をかく。

海水浴場に来たパリの金持ちの父娘がジゴマに襲われ、ジゴマはこれを人質にして山に籠り身代金を要求、本物の警視総監は要求の金をカーターに託す。カーターはオルガと山案内人をたてて山へ登って行く。(アルプスではポーランが山案内人に化けた) 山案内人は実はジゴマで、カーターはまんまと捕虜になる。しかしオルガはカーターを救いだし、ジゴマの籠る岩穴を爆破して死に至らしめんとする。

しかしジゴマは不死身だからいかなる事態に至ろうと死なない。ツーロン港沖の小島にあらわれ、アヘン窟でアヘンを吸いながら集まる観光客のふところを狙っている。(次々と奇抜なシチュエーションがとびだしてくる) オルガの手引きでカーターはモーターボートで島に行く。しかしジゴマは予め知っていて待伏せ、大乱闘になり、ついにカーターはモーターボートで逃げる、ジゴマ一味がこれを追う。追いつ追われつ大追跡。カーターは濃霧に助けられて危く逃れる。

ジゴマはマルセーユに移り、銀行を襲う。カーターとオルガがこれを知って追跡するが、ジゴマの計略にかかり監禁される。二人は隙を見て小屋に放火して脱出、馬で逃げる。ジゴマと情婦は馬で追跡、情婦はオルガをとらえ、くんずほぐれつの格闘となる。一方追われたカーターは落馬、負傷して一軒の家へ救いを求める、そこにはなんとオルガが逃れていた。二人は無事をよろこび、ある計画を

練る。

新聞にカーター探偵の死が報じられる。ジゴマはレストランに子分を集め、祝賀パーティをひらく。カーターはボーイに変装して見事ジゴマを逮捕する。

ジゴマは警察の厳しい取調べに、もはやこれまでと毒をあおって自殺する。(これで一応終わりとなるが、ジゴマは不死身だから、つづけようと思えば生きかえらせればいい)

ながい紹介をしたのは、このジゴマが日本の活動写真に与えた影響がはかり知れぬほど大きいからである。面白い、快適なテンポ、悪への魅力。

これらの各シーンは、あたかも溝口健二のように、ながいワンカット(引きっぱなし)なのである。マグダラ寺院の秘密の地下室へジゴマと一味が姿を消す場面も、ワンカット撮影で、ロングからカメラの近くへ人びとはやってきて次々と地下へ消え、誰もいなくなると、画面右に立っていた大理石像が動いて歩きだし、これがポーラン探偵とわかり(観客に)地下へ消えて行くという撮影である。だから登場人物の動きは立体的となり、ロングと近写の役目をはたすので、日本の活動写真のように平面的ではなく、場面と場面がわりと早く転回するから、カットバック的な効用となってテンポが出てくるのだ。

なんとしてもテンポの原動力は、怪盗ジゴマと探偵の変装くらべチエくらべである。善と悪とがつねに同一画面にいるということが、

すでに対立した相剋の同居であって、自然のテンポを巻き起こす条件になっている。

全篇の魅力は、ジゴマの颯爽たる神出鬼没である。ジゴマより探偵がまさっていたのでは、ジゴマはたちまち捕えられるわけで、シナリオはジゴマがいか探偵の裏をかくかということにチエをしぼる。悪いほうが魅力があるというのが、大衆を熱狂させたのだ。当時の日本の道徳観では、悪が善をほんろうすることは考えられなかった。だが現実はどうであったか、善より悪がつねに颯爽としていたのである。大衆は正直だ、ジゴマに喝采を送った。これを活動弁士がたからかにうたいあげた。(山野一郎著『人情映画ばか』より)

花のパリか、ロンドンか、月が鳴いたか、ホトトギス、フランスはパリの町に、今や起こる怪事件、銀行、会社、オペラ劇場、あるいは富豪の邸宅と、風のごとき怪盗団、大胆不敵、現場に残るZの一字、Zとはそも何者か、ここに名探偵ポーラン、この秘密をばあばかんとす。Z団の首領ジゴマ、すなわち変装すれば、ポーラン探偵また変装、ジゴマが勝つかポーランが勝つか、虚々実々、火花を散らす智恵くらべ、山雨まきにいたらんとして、風楼に満つ、はたして勝利は正か邪か内容はいわぬが花の玉手箱、文明開化は、電気応用、機械の回転につれまして、大車輪に申しあぐれば、これまた絶大なる拍手喝采のうちにご覧のほどを……。

列車上の格闘の場面はこうなる。

されど、無念、ジゴマの力やまさりけん、あつという間にポーラン墜落、あわれ重傷の身とはなった。飛んで火に入る夏の虫、してやったりと、悪漢ジゴマ、倒れしポーラン探偵しり目に、カンラカンラとうち笑う。ジゴマを乗せた汽車は何処へ、ポーラン探偵の運命やいかに、残念、今週上映前篇のおわかれ……。

『ジゴマ』を輸入した福宝堂は、悪漢ジゴマは日本の人情には合わないだろうと躊躇したが、上映してみると大盛況、むかしから日本人は泥棒が大好きだからな、と笑いがとまらない。浅草金竜館は小屋がはちきれんばかりの大入満員。ジゴマを真似てジゴマごっこは大はやり、玩具のピストル弄ぶ少年犯罪が頻発、花柳界でも芸者が「いやあん、ジゴマ!」「いやあん、ジーさん」と大はしやぎ、金竜館は続映につづく続映。

で、官憲の介入となる。明治四五年一〇月一日の大阪朝日新聞は大きな記事で扱っている。近頃市内の活動写真館で写せし彼の強悪獍猛なる大罪人ジゴマは満員の盛況にて——とし、『ジゴマ』はわが国の道德感を著しく害する好ましからざるものとして上映禁止としたと報じている。

牧野省三はジゴマを見たか

牧野省三はジゴマを見たであろうか。その頃、牧野省三は京都でししふんじんの勢いで尾上松之助の忍術映画を量産していたのだから、東京まで出てきてジゴマを見るひまはなかったかもしれない。いやしかし、活動写真の未来にうづばつたる野心をもっていた若きカッドー屋だから、このバカ当りしたフランスの活動写真を見に上京したかもしれない。彼は横田商会京都撮影所のプロデューサーであり監督であり所長役でもあった重要ポストにいたわけで、社用で上京する機会もしばしばあった。また、金竜館の大当りに乗じて、大阪千日前ルナパーク劇場でも上映されたので、見に出かけたかもしれない。

だが、牧野省三はジゴマを見た感想を残してはいない。「牧野省三語録」は数あるが、外国映画について語ったものはない。好奇心旺盛なカッドー青年牧野省三は活動写真にらんと目をかがやかせていたのだから、輸入された外国映画から学ぶところはあったはずで、もしジゴマを見る機会がなかったとしても、ジゴマとは何ものかぐらい人を介して知っていたであろう。なぜなら、『ジゴマ』のテンボが松之助の忍術映画に役立ったであろうから。

牧野省三はねっからの芝居人である。明治二二(一八七八)年九月

二〇日京都に生まれた。父藤野齋、母牧野やな。母方の養子となつて牧野姓を名乗った。母は西陣の旦那衆に義太夫を教え、大野席という寄席を経営し、後に千本一条上ルにあった千本座を手に入れた。省三はこれを手伝つて興行師としての一步をふみだした。母の義太夫を聞きながら育つた省三は、体の芯まで日本の義理と人情の味がしみこんでいた。

省三は材木商石橋屋の一人娘たねと結婚した。省三が二〇歳、たね一七歳。三男五女をもうけた。上四人が女で四女は女優となったマキノ輝子(後の智子)、長男はマキノ雅弘監督、次男はマキノ光雄(プロデューサー)。また上七軒の妓樓の娘でるとなじんで松田定次監督をもうけた。千本座の座主として羽ぶりのよい生活であつた。因に廓上七軒は千本の近くである。

牧野省三が、横田商会の横田永之助と出会つたのは、省三、三〇歳の明治四一(一九〇八)年である。横田は、稲畑勝太郎がフランスから持ち帰つたりユミエール兄弟発明のシネマトグラフの興行で思わぬ利益をあげ、これに味をしめてフランスのパテー社と契約し、パテー映写機を自ら操つて巡回映写を行つていたが、輸入のフィルム量が需要に追いつかなくなり、また日本人には日本の物を見せねばと、活動写真製作に乗り出した。

千本座にも、横田の活動写真がときどきかかつていたので、横田は牧野をよく知つていた。新たな製作に乗りだすにあたり、この芝居人にと白羽の矢をたてたのであつた。牧野省三もまた、活動写真という怪物になみなみならぬ好奇心をかりたてている時だつた。

それまで省三が見た日本の活動写真は、『切れお富』とか『己が罪』とかいう芝居のサワリの場を二場とか三場とか写しているだけで、平面舞台で行われる芝居を、ロングショットのワンカット、ワンシーンで写しているだけだつた。

『いもりの黒焼』(福井繁一作、明治四一年六月封切)というものが評判で見たが、これとてたわいない喜劇であつた。

住吉神社の太鼓橋の傍らで乞食が物乞いをしている。そこへ参詣の美人がやってくる。若い男が「いもりの黒焼」という惚れ薬を買つて、美人にふりかけようとすると、過つて乞食婆にふりかかる。そこで男は美人ならぬ乞食婆に追っかけられて逃げまわる、というお話。シナリオはもちろんなし、思いつくままに三段階に分けて撮つたもの。つまり三場面三ショットである。

牧野省三の第一回作品は『本能寺合戦』(明治四一年九月一七日・錦輝館)。

牧野省三談「『本能寺合戦』の映画は、横田にとつても私にとつても忘れることの出来ない思い出である。実景は真如堂京都市浄土寺町の境内を使い、出演俳優は中村福之助・織田信長・嵐璃徳・森蘭丸(その他大勢で、当時千本座に出演していた一座をそっくり使つた(田中純一郎『日本映画発達史』))

シナリオはなしで口だてである。芝居の本能寺の場を芝居人の省三は丸暗記しているから、その場その場を口だてで言い、出演者もまた芝居人だから、ツーカーであつた。

第二回は『菅原伝授手習鑑』の車引の場、第三回は『児島高德眷

の桜」いずれも近くの北野天神で撮影。第四番目は『明烏』第五番目は『安達原三段目袖萩祭文の場』第六は『桜田騒動血染雪』である。いずれも近くの寺や神社の境内を使って二日三日で作った。

こういうとき、牧野省三は尾上松之助に出会った。金光教信者である省三は岡山県玉島町の本山へ参り、ちょうどこの町にかかっていた旅芝居で一人の役者を見た。尾上松之助である。「狐忠信」をやっていた。この目の玉の大きい役者はやたらと動きだけが活発だった。そして顔がいやに大きかった。直感で省三は活動役者にもってこいとらんだ。まず千本座へ出演させて見て目玉と顔をつくづくながめ、これだ、と松之助主演で撮ることにきめた。

牧野省三談「松之助の第一回作品は、私が岡山で初めて見た彼の狂言に因んで『碁盤忠信』と決め、四二年一〇月一七日の神嘗祭に、千本座の興行に差支えないよう、朝八時から初めて、全二場約七百尺のものを撮った(中略)第三回の『石山軍記』からは時々カメラの位置を換えるようにした。楠七郎に扮した松之助が、櫓の上で御文章を読み上げるとき、敵の軍勢を睨みつけて、眼玉をギョロリとむいて見せた。それ以来世間では彼を「眼玉の松ちゃん」といった」

省三は松之助映画を明治四二(一九〇九)年から四五(一九一二)年までの三年間に、一六八本作った。一年間五〇本をこえる量産である。いくら早撮りだといっても人間業とは思えない。

牧野省三談「プリントの焼増ということは余程後になって流行したことだが、その頃はプリントは一本しか作らなかったから、注文に応じて濫作して数を間に合わせることになる(中略)横田の方から

ヤイヤイと催促がくる。仕方がないから懐ろへ入れるだけの講談本を詰めこんで行き(傍点筆者)実景撮影や舞台撮影の際、ちょっとした衣裳の着換えや帯の結び替えて、即座に違った主人公を作り上げ、一度に三、四種類の劇を作ったことはザラにあった。脚本を一々書いていたら間に合わないから「口だて」といって、自分の頭の中で筋書を作り、場面場面のセリフは自分が適当に傍で喋り、その通り役者を動かして撮影した」

牧野省三は、脚本なしの早撮りの中で、一本一本の貴重な経験を積みながら、自分の監督法を作りあげて行った。松之助映画は忍術映画であって、パツと消え、パツと現われ、大蛇になったり幕になったり、その変幻自在はテンポとなったが、それはちょうどジゴマが日本へ現われたときでもあった。牧野省三はジゴマを見たか、見なかったか。いずれにしても自在な出沒ということが「ジゴマ」にも「忍術」にも生命であった。ただちがいは『ジゴマ』には「シナリオ」があり、松之助映画の省三には「口だて」があつてシナリオがなかった。

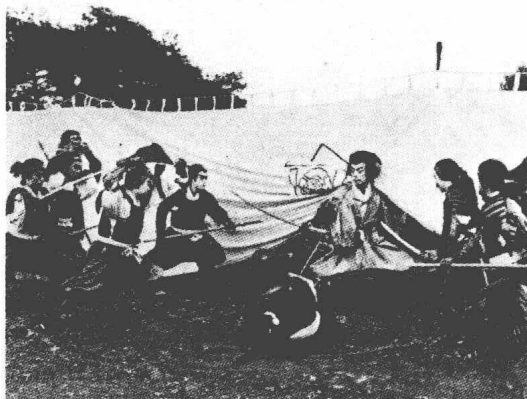
牧野省三は、百数十本の松之助映画を濫作しながら、脚本の必要性を痛感したにちがいない。だからのに、マキノプロダクションをおこして、一本の脚本に人気俳優よりも高い脚本料を払うことになる。



尾上松之助(左)と牧野省三



『怪鼠伝』(大4, 牧野省三監督)左 尾上松之助



『曾我兄弟』(大4, 牧野省三監督)中央 尾上松之助



『塙の太郎, 一心太助』(大4, 牧野省三監督)



『忠臣蔵』(大2, 牧野省三監督) 尾上松之助(左)と実川延一郎



『実録忠臣蔵』(大10, 牧野省三監督) 市川姉蔵(左)と尾上松之助